

BATTLE BALLER

HARUKA

I - 4

美しき刺客

(後編)

Ψ

バトルボーラーはるか

第一集

バトルボール

第4章

美しき刺客

(後編)

作・Ψ (Eternity Flame)

「フォーッ。ゾクゾクするのお。このザンギエフ様を楽しませてくれよッ。」

「お兄ちゃんッ！おじさんをお願いッ。」

「ああ...分かった。」

「ザンギエフ！あなたを**焼き尽くすッ！！**」

仁王立(におうだ)ちの体勢から、大きく左手を右から左側へ横一文字(いちもんじ)を描きながら、左手を上から下に移動させ十字架を切ると、その十字架から棒状の何かが生まれた一ツ。

「フレアクロス(焰旋棍)！！」

それはジャン・ピエール戦に使った時のトンファーであった。屈(かが)んだ状態からすつくと立ち上がり、フレアクロスを手にしたはるか。ヌンチャクのようにそれを振り回し構えると、放たれた弓矢のように凄(すさ)まじいスピードでザンギエフに攻撃を仕掛けた一ツ。

ドガガガガガガガガ・・・

はるかの猛攻(もうこう)は止まる所を知らず、肉眼(にくがん)では捉(とら)えきれないスピードの連続殴打(おうだ)が果てしなく続くッ。

ドウボツ!!

「ぐべはっ。」

バキッ！！ドドドドーン・・・

連打の最後はボディへの強烈(きょうれつ)な一撃だッ!!くの字になったザンギエフの顔めがけ、はるかのハイキックが炸裂(さくれつ)し、十数メートル先までザンギエフは吹っ飛ばされた一ツ!!

「フォーウ！！なかなかのスピードだな。しかーし、全然効かんあ。」

「あなた普通(ふつう)の人間(にんげん)じゃないわねッ。」

「我がロシアのおーッ科学力(かがくりき)はーッ世界(せかい)一(いち)いいーッ！！」

「科学力(かがくりき)！？」

「心拳(しんけん)だか何(なに)だか知らんが、ロシアの科学(かがく)の最高傑作(けっさく)と言われるワシの前(まへ)ではチョロイものよッ。今度はワシの番(ばん)じゃ!!」

そう言うと、鎖がついた大きな球体を地中より引き出した一ツ。

「シャラポワ・トマホーク！！」

ロシアの闇社会の科学者である、シャラポワ博士の開発した特殊(とくしゅ)金属でできた球体は、ダイヤモンド並の硬度を誇るツ。それゆえ非常に重いのだが、ドーピングで増強された筋力に物を言わせ投げつけてきた一ツ。

「フォーウ！！」

ドゴオーン

その球体の威力(いりよく)は鎖(くさり)の遠心力も加わり、爆弾(ばくだん)のような破壊力(はかいりよく)で大地を削(けず)りとった一ツ。たまらずはるかは空中へ飛んだ一ツ！！

「フォーウ！！空中では身動き取れんゾ一ツ。さあ、落ちて来いツ。ワシのとおきのアッパーカッターを喰らわせてやるわ一ツ！フォーウ！！」

もし、ザンギエフの全力のアッパーが、はるかのようなか細い少女に直撃したなら、砕(くだ)け散ってしまうのでは...重力には逆らえず、はるかが落下を始めたツ。

「来た来た一ツ！！くらえ一ツ。シャラポワ・ギャラクティカマグナム！！」

落下点を見越して移動したザンギエフが、間近に迫ったはるかに渾身(こんしん)のアッパーカッターをかまそうとしたツ。それは、まるで軽四自動車が人に向かって突っ込んでくるような迫力だ一ツ。

「もらった！フォーウ！！」

はるかの砕け散る音がするかと思いきや...渾身(こんしん)のザンギエフの一撃は、確かにはるかを捉(とら)える位置とタイミングに放たれたにも関わらず、空振りした一ツ！！

ブーン・・・

空を切るだけに終わったザンギエフのウィニングショットは、大げさに不発の音がただけに終わった一ツ。

「何いいー！？」

狼狽(ろうばい)するザンギエフ。空高くに舞い戻ったはるかの背中から、真っ赤な翼が生えていたからであった一ツ！！

ドゴオーン

様々な角度からの打撃に翻弄(ほんろう)されたザンギエフ。最後は斜(なな)め真っ直ぐに急降下(きゅうこうか)していきながら、地上へ激突したーッ！！

「ゴホァーッ！！…ウグググ…」

「さあ、沙織を助ける方法を教えなさいッ。」

「うぐおお…シヤラポワ博士の科学が破れるとは…お前、強いな…」

「いいから早く教えなさいッ！！」

「ワシは知らん…」

「何ですって！？」

「ワシはそんな話は聞いとらん…だっ、だが…もし何かを知りたいというのなら、これからの戦いに勝ち続ける事だな…そうすれば…いずれ…ぐはぁッ！…」

ザンギエフは吐血(とけつ)して意識を失った。

「ハハハッ」

高笑いする男の声が聞こえた。

「誰ッ！？」

「ざまあねえな、ザンギエフ！！」

遠まきに見えていた男の影。ズバ抜けた脚力(きやくりよく)で大地を蹴りあげると、突風(とつぷう)を呼び起こすほどのスピードで、はるかに迫ったッ。

ドゴーン

ザンギエフとはるかの間に割って入って来た男。破壊力(はかいりよく)抜群(ばつぐん)の蹴りを見舞(みま)った形となったッ。

「いきなり何するのッ！」

躲(かわ)しはしたが。奇襲(きしゅう)を受け、狼狽(ろうばい)したはるかは語気を荒げる。

「挨拶がわりだッ！取っとけ。」

「あなた誰よッ！？」

「俺の名か？俺はワンピン。貴様を倒して来いと、あるお方から命を受けて来た。さあ、構えろッ。」

そう言うのと、ワンピンが青龍刀(せいりゅうとう)を両手に持ったッ。

「俺がやろう。」

「お兄ちゃん！？」

「お前はおじさんを連れて離れてろッ。」

「お前なんぞに用はないッ。スツこんでろッ！！」

「俺が怖いのか？」

「何を一ッ！？…いいだろう。貴様を殺して俺の力を見せつけてやるッ。」

「フッ、お前に出来るかな。」

「そこに情(なさ)けなく転がってるヤツと、俺を一緒にするなよッ。貴様ら日本人には分からんだろうから教えてやろう。見よッ！この髪をッ。」

雷、と書かれた武道着も派手(はで)であったが、頭髪の一部だけ鬘(まげ)みたいに長くし、しかもバカ殿のように立ててあり、それ以外は剃(そ)りあげた特異さが目を引いた。

「これぞ我が雷帝門(らいていもん)の武芸師範(しはん)に許された特権。武極髪(ぶきよくはつ)、よ！！」

「おしゃべりな奴だな。ゴタクはいいからかかって来い。」

「殺してやるッ！！」

腰(こし)を落とし青龍刀(せいりゅうとう)を構えると、強靱(きょうじん)な脚力を使った爆発力で低空飛行(ていくうひこう)し、一目散(いちもくさん)に突っ込んできた一ッ!!

「牙狼拳奥義(がろうけんおうぎ) 天狼咬牙爪(てんろうこうがそう)！！」

常人(じょうじん)には考えられぬスピードの突進(とっしん)だが、秀樹(ひでき)は難なくかわしたッ。

「これがお前の全力か？」

「かかったな！」

ワンピンが通り過ぎる動きに合わせて、体を入れ替えた秀樹。だがその瞬間、背後から鋭利(えいり)な刃物が襲ってきたッ。

「くッ！」

ザシユ×2

直前で気付いた秀樹だが、数発を躲(かわ)しきれずにカスリ傷を負った一ツ。ロイヤルブルーのライダースーツの袖(そで)から血が吹きだすッ。

「...なるほど、内力も多少は使えるってワケだ。」

「我が剣撃の後には、内力で造られた牙が貴様を襲う。これはどうだ一ツ。」

今度はジグザグにワンピンが飛び跳ねたッ。剣撃から生まれた内力の刃が、縦横無尽(じゅうおうむじん)に秀樹に襲いかかるッ！！

「牙狼拳(がろうけん) 四面双牙(しめんそうが)！！」

全てかわした秀樹だが、超人的跳躍力(ちょうやくりよく)で空へ飛んだワンピンが、高速で両手の青龍刀(せいりゅうとう)を振り回し秀樹を襲った一ツ！！

「牙狼拳超奥義(がろうけんちょうおうぎ) 牙王灰塵撃(がおうかいじんげき)！！」

素早い回転撃からは、内力でできた刃が雨あられと飛び、躲(かわ)す事など叶わぬ状態。しかし、その場に止まっていたのでは、降下するワンピンが振るう、扇風機(せんぷうき)のように目まぐるしく回転する剣の餌食(えじき)となり、ズタズタに切り刻まれるのは必定(ひつじょう)であると考えられたッ。

「お兄ちゃんッ！！」

「フハハハッ。もらったッ！！」

秀樹の身を案じ、思わず叫んだはるか。ワンピンは勝利を確信して、余裕(よゆう)の笑い声を上げながら更に加速し、秀樹へ迫った一ツ！！

ガキーン・・・

「ぶひゃッ。」

金属の激突音と共に、ワンピンが血ヘドを吐きながら吹き飛ばされたーッ！！

「ゴハァッ...！な、何故(なぜ)だッ...！？」

秀樹の周りを、淡い青色をしたオーラが球体をなし、包んでいたッ。

「ウォータープルーフ(水の障壁)。お前はもう俺の体に指一本触れる事はできんッ！」

秀樹の瞳に蒼白(あおじろ)い光が宿ったッ。

「何をーッ?ならばもっと多くの剣撃を浴びせ、その壁ぶち抜いてくれるッ！」

「それももう叶わないな。」

「何ッ！？」

微妙に感じる風の流れ。それが青く色づき、ワンピンはまるで水中に佇んでいるようになったッ。

「レイクディスクトリクト(湖水地帯)。この空間は水が支配した。ご自慢の脚力(きゃくりよく)も生かせまい。」

「ぬぐッ...」

「いい線、行ってたよお前。低いカテゴリーでだけどな...今度は俺の番だな。」

秀樹の額から水の雫(しずく)のような紋章(もんしょう)が浮かび、背後にはマリンプルーの龍の形をなしたオーラが現れたーッ。

「ぬおああ...こ、これは！？」

「リヴァイア(水竜)心拳。徳島での土産によく見ておくがいい！！」

両手で渦を描くような動きをすると、瑠璃(るり)色をした木の枝のような物が生まれたーッ。

「ラグナセイバー(珊瑚の剣)！！」

ワンピンは秀樹の持つ強大なオーラに怖(おそ)れてしまい、闇雲(やみくも)に青龍刀(せいりゅうとう)を振り回しだしたッ。

「ぬりゃーッ!!」

まるで殴り方も知らない子供がケンカをした時の、ぐるぐるパンチのような振り回し様が、混乱(こんらん)の度合の深さを物語っているッ。しかし、そんなワンピンに、秀樹は凄(すさ)まじいスピードで近付き、容赦(ようしゃ)ない打撃(だげき)を加えたーッ！！

「沈めッ。オクトパスビート(8連重水撃)!!」

必死の抵抗も空しく、水流を引き裂く秀樹の重い打撃にワンピンはガードは弾かれ、続けざまに8方向から一斉(いっせい)に叩きのめされたーッ。厳密(げんみつ)に言えば腕は2本しかないので時間差はあるが、あまりにももの迅(はや)さ故(ゆえ)に八方同時に見えたのだッ。最後の一撃が決まると、秀樹の支配する空間からワンピンが吹っ飛んだーッ！！

「ぐぎやああ...」

「さあ、俺の質問に答えてもらおうか。」

「ぐおおお...」

「...手加減したつもりだったんだがな。治療してやるから約束通り俺の質問に答えてくれよ。」
そう言って秀樹が近づこうとすると、ワンピンが落とした刀を手にし、再び立ち上がろうとしたッ。

「きっ、貴様...ワシはまだ負けを認めておらんぞッ...！」

「...まだやるのか！？よせ、もう勝負は着いてる！」

「構えろッ！！」

「...仕方がないな。」

「貴様の技は見切ったぞ。」

急所を庇(かば)う「さんちん立ち」の姿勢をワンピンが取ったッ。そして扇風機(せんぷうき)のように青龍刀を高速回転しだしたーッ！！

「最終奥義 三陳滅界陣(さんちんめっかいじん)!!」

暴風が巻き起こり、水の結界がけし飛んだッ。

「これがお前の奥義か？」

「フハハハ。これは、そっちの赤毛の娘と戦うまでの取っておきと思ってたんだがなッ！ど
うだ、手も足も出まいッ！！」

リヴァイア心拳の作り出した水の結界を打ち消し、得意気なワンピン。しかし、秀樹はことも
なげにこう言い放った。

「それがどうしたッ。」

「何ッ！？」

「レイクディスクトリクト(湖水地帯)は、本来は格下の敵の拘束(こうそく)に使うもの。俺が本
気を出せばそんな所じゃない。」

「やってみろッ！！」

ワンピンの呼吸が整うと、高速回転する剣撃から、再び内力の刃が飛び出した一ツ。

「くらえッ 竜巻牙狼殺(たつまきがろうさつ)！！」

旋風(せんぷう)に紛れた内力の刃は螺旋状(らせんじょう)に帯(おび)なし、秀樹めがけて飛んで
いくッ。

「ハハハッ。死ねえッ！！」

勝利を確信したワンピン。だが次の瞬間。彼の表情は真っ青になったッ。

「...しょうがないな。水泡(すいほう)に潜(ひそ)める海神(わだつみ)の力よッ、集(つど)えッ。

リヴァイアント(海竜神愴)！！」

三叉(みつまた)の矛先(ほこさき)に、柄(え)には海竜の装飾(そうしよく)をした槍(やり)が現れ、
ワンピンの放った数多の刃をことごとく打ち返した一ッ！！

「何ィ一ッ！？」

「ほら、頑張って刀を回さないと、自分の放った刃にヤられるぞ？」

「小癩(こしゃく)な一ッ。だが、この攻防一体の奥義に死角はないッ!!」

ドガガガガ...

必死に防いでいるワンピンだが...

グサッ

高速回転する、刀の間を縫(ぬ)った刃が肩口に刺さった一ッ！！

「ぐおあ一ッ！！な、何故(なぜ)だあ一ッ？」

「打ち返したから、お前が放った時よりスピードが上がってる。だから防ぎきれない。当たり前だろ？」

これ以上の直撃を避けようと、ワンピンが肉体の限界を超え、回転速度を上げようとしたッ。

ブチッ

「ぐぎやああーッ!？」

「あらー。こりや靱帯(じんたい)がイッたかな。」

「ぐおお...貴様あーッ!!」

腕を押さえながらワンピンが怨(うら)みがましく睨(にら)みつけたが。秀樹は既(すで)に次の攻撃体勢に移っていたッ。

「トドメだ。少しばかり痛いぞ。」

「ヒッ...な、なんだ?そのバズーカのような物は!？」

「ビッグウェーブランチャー(水竜神波動砲)!!」

「な、何、ソレ?やっ...やめてくれーッ!!」

「古(いにしえ)の預言者モーセが紅海(こうかい)を真っ二つにしたとされる、幻の神技。受けてみろッ!!」

「ひィー...や、やめてくれーッ。」

「エネルギー装填(そうてん)120%...発射!!」

ドウオオオオーン...

「ぎいいいやああー...」

暴風が吹き止んだ後も、まだ土煙が立ち込めていて、そこに倒れ込んでいるワンピンの姿が確認できた。

「ウグッ。」

「どうしたのお兄ちゃん!？」

ほとんどダメージを受けていないはずの秀樹の顔が、苦痛に歪(ゆが)んだっ。

「くっ、こ、これは!？」

「フフフ。よく急所を避けたわね...」

いつの間にか5人の影が土煙の先から現れたーッ。その中心にいたのは...

「チャン...リンシャン!？」

「私の名前憶(おぼ)えててくれたのね、はるかちゃん。」

「何故、わたしの名前を？」

「説明してあげたいんだけど時間がないの。早速(さっそく)で悪いんだけど、ソロモン王の秘宝の在処(ありか)を教えてください？」

「そんなの知らないッ。」

「あら、知らばっくれる気?そこに倒れてるお兄さんがどうなってもいいのかしら。」

「何ですって？」

「ぐあッ...!!!」

「お兄ちゃん!!どうしたの!？」

「フフフ。あなたのお友達と同じ様にしたのよ。」

「そんな...」

「心配してるトコ申し訳ないんだけど、早く教えてください？」

少し間を置き沈黙(ちんもく)していたはるかだが。それは経験した事のない怒りが、マグマの如(ごと)く全身の血をたぎらせているからであった。

「お兄ちゃん達を助けなさいッ!!」

「それが人に物を頼む態度？」

やり場のない悔(くや)しさに震えるはるか。

「どうするの？」

「くッ...!!!」

「あなたの悩みに付きあってる暇(ひま)はないの。とりあえず捕まえてから、体に訊(き)く事にするわ。お前達、かかれッ!!」

リンシャンの両脇(りょうわき)にいた4人の付き人達が一斉に襲いかかってきたッ。

『哈(は)一ッ!!』x4

4人の攻撃をかわし続けるはるか。反抗すれば、傍に倒れている秀樹達が、リンシャンに何をされるか分からない。かといって黙(だま)って捕まる訳にも行かず、どうしていいのかという迷いに気を取られ、はるかが足を踏み外した一ッ!!

「もらったーッ！」

4人の付き人の内の1人が、はるかを拘束(こうそく)しようと襲いかかったーッ！！

ヒュッ

「何ッ！？」

はるかを拘束しようとした女だが、鋭い影が急に現れ、それを阻んだッ。

「駄目(だめ)じゃないか。女の子が、そんな物騒な物ふり回しちゃ…」

「何奴！？」

和装(わそう)で現れた者の正体は正友(まさとも)であった。

「正友！！」

一瞬、嬉しそうな表情を浮かべ、声を上ずらせたはるかであったが—

「遅いじゃないの。何してたのよッ!？」

「悪い悪い。ところでお前、何でやられかけてんの？」

「お兄ちゃんを盾(たて)に取られてんのッ！」

「あれっ？ありゃ、昨日のお姉ちゃんじゃね？」

「人の話聞いてんのー！！」

「ちょっとおー、ソコの一番奥にいる綺麗(きれい)なお姉さーん。何かオレ達に用ですかあ？」

はるかの話を一向に聞く様子のない正友だが、的確(てきかく)に女達のリーダー格を見切り、話しかけていた。

「あなたに名乗る理由はないけど。いいわ、答えてあげる。私はチャン・リンシャン。手短に用件を言わせてもらうわ。そこの少女を渡して！」

「嫌(いや)だと言ったら？」

「ソコに倒れてる男が死ぬ。」

正友を見ると、つつい、いつもの調子が出てしまうはるかだが、それを聞いて深刻(しんこく)な顔をした。

「はるか、暗くなる事はないゾ！この美人を打ちのめしたら、秀さんと沙織ちゃんは回復する。」

「えっ！？ホント？」

「そうだろ？雷帝門のチャンさんよオ。」

「貴様、何故それを！？」

「オレの盛り場ネットワークを、見くびっちゃ～イケないぜ！！」

「アンタ、そんな所に行ったのッ！？」

相変わらずはるかの話を見殺しする正友。

「中国武林裏48門の頂点に君臨(くんりん)する武術結社(けっしゃ)。そのトップがお出ましとは。今やユーラシア大陸全域の裏社会を支配するほどの組織が、こんな田舎で宝探しかい？すだちお土産にやるから帰ってくんね？」

「ふざけたことを！！」

「...やっぱダメか」

「フッ、我々の目的を知っているなら話は早い。その娘を渡せっ！！」

「それは出来ない相談だな。」

「何ッ！？」

「何の抵抗もせずに降参(こうさん)するなんて損じゃん。ひよっとしたらオレ達が勝つかも知れないしー。案外、裏武林も大した事ないかもしんないしー。」

「貴様あ...!!」

「はるか。秀さんとあの4人の女の子達は任せませ。」

「正友、あの総大将はわたしにやらせて。」

「はるか、今のお前じゃアイツとやるのはキツイと思うぜ？...分かったよ。お前に任せる。」

はるかの強い決意に、それ以上は反論できない正友であった。

「ありがとう。」

「お話しは終わったかしら？」

「ええ。私があなを**灼(や)き尽くすッ！！**」

はるか額に、ジャン・ピエールと戦った時のような絵文字が浮かんだッ。そして背中に羽が生えたかと思うと、フレアクロスを瞬時に召喚(しょうかん)し、**壮絶(そうぜつ)**なスピードでリンシャンへと迫ったーッ

「ライトニングクロウ(雷帝鉤)」

リンシャンも即座に武器を出し応戦したッ。

ガシャーン

響きあう刃。それを見ていたリンシャンの部下達が、二手に分かれ加勢に向かおうとしたッ。

「おっと、アンタらの相手はオレだけ。」

「お前の相手など私達二人で充分だわ！」

「やっぱりアンタらの声、聞き覚えがある。」

昨日と同じ編(あみ)笠(がさ)を被ってはいたものの。四人組であったので、誰が誰なのか区別はつかないが、イーフェイとジンインの声が、その中に含(ふく)まれているのは聞き取れる。しかし、今はそれよりも二手に別れた女達を、どうやって引き止めるかが正友には先決であった。二人組の片方が正友をしっかりマークしているので、安心しているもう片方の二人組は、躊躇(ちゅうちょ)なくはるかを目指している。

「行かせるかッ！！」

「自分の心配をしろッ！！」

足止めを分担している女の二人組が、正友に襲いかかったッ。すると、正友は突然立ち止まり、構えると両手に内力を集め、渦巻く気流が銀色に輝き小鳥の姿になった。

「風刃(ふうじん) 飛燕(ひえん)！！」

ガシュザシュ・・・

「何ッ！？」

窮地(きゆうち)のはるかを救った時と同じ刃が、4人の女達を襲うッ。不意を突かれた女達は回避するのに精一杯で、体勢を崩し、倒れる者もいたッ。

「やっぱ昨日のお姉ちゃんじゃん。」

「貴様もあの娘と同じ技を使うのか？」

「うーん、ちょっと違うけどまあそんな所かな。ところで、そっちのお姉さん達は何て名前なの？」

「私はリーファ。」

「我が名はジンイン。」

「するってえと、お姉ちゃん達が雷帝門の四天王かい。でもまあ、4人がかりでもオレには敵わないんじゃない？」

「どうやらあなたの大口は、ハツタリじゃなさそうね。」

「イーフェイちゃんだったっけ？分かってくれたなら、あとの三人の可愛い娘ちゃん達と一緒におとなしくしててよオ。」

「馴れ馴れしく呼ぶなッ！！それに私の名はジーインだッ。」

「あー悪い！！はるかから話で聞いてただけなんで、どっちなのか分からなかった。」

「まずはお前を片付けてそれからチャン様をお助けするッ。リーファ、ジーイン、イーフェイ...行くぞッ！！」

『はっ！』×3

正友を、ジーイン達4人が四方から囲んだッ。

「女囚拳(じょしゅうけん) 飛刀拷問斬(ひとうごうもんざん)！！」

四方から正友に向けられた無数の飛刀。さらにジーイン達は飛び跳ねると、上空からも飛刀を投げ下ろし逃げ場がないッ。

「風奏(ふうそう) 神楽龍姫(かぐらりゅうき)！！」

絶体絶命(ぜったいぜつめい)のピンチにも目を閉じ、両腕を斜(なな)めに胸元で交差させる正友。その掌(てのひら)から、龍の装飾(そうしよく)がなされた銀色の扇子(せんす)が現れたッ。

「天翔神記(てんしょうしんき) 壺之舞(いちのまい)！！」

全身の筋肉を一気に弛緩(しかん)させるような、ゆったりとした構えと動き。幽玄(ゆうげん)の世界を醸(かも)し出すその舞い姿に、魅(み)せられながら倒れていた者は数知れない。ジーイン達の投げた、全方位からの飛刀のことがごとくが弾き返されたッ。

「くっ、貴様があの飛龍(ワイバーン)心拳の使い手だったとは…」

「お姉さーん。もうこんなのヤメにして、僕とお茶でもしなあい？すだちあげるかさあ♪」

「ふざけるなッ。者供、こ奴が我らの仲間を葬(ほうむ)り続けてきた飛龍(ワイバーン)心拳の正友じゃ。カタキを討てッ！！」

「ちょっと待てよ。オレ、秀さんと道場破りとか武者修行に回ったけど、殺した覚えなんてないぜ。」

「問答無用(もんどうむよう)！かかれッ！！」

ジーインの号令一下、一斉攻撃が始まったッ。

「女囚拳奥義(じょしゅうけんおうぎ) 四神花滅壊楼(ししんかめつかいろう)！！」

腰の軟刀(なんとう)を抜くと、目にも止まらぬ速さで振り回し、その軌跡(きせき)が牡丹(ぼたん)の花のような残像を描きだした一ツ。

「ほほう。内力も使うんだ。」

「死ねええーッ！！」

剣速に描かれた牡丹のシルエット。それは内力の熱を帯び朱(しゆ)に染まったッ。まさに紅く咲き誇(ほこ)る牡丹が、その荘嚴(そうごん)さに魔物を潜(ひそ)めて襲いかかってくるといった感じだ一ツ。

「飛龍酔心(ひりゅうすいしん) 姫神楽(ひめかぐら)！！」

その昔、香川県のとある村が龍の怒りを買い、滅(ほろ)ぼされそうになった時の事。一人の巫女(みこ)の奉(ほう)じた舞いが龍の怒りを鎮(しず)め、村を救った。龍妃(りゅうき)と称(たた)えらし巫女の末裔(まつえい)は、今もなお日本伝統舞踊の人間国宝を輩出している。

その血を引く正友の静かなる舞いが、フラットな動きとなり、楚々(そそ)とした雅(みやび)さの中にしたたかな躍動感(やくどうかん)を孕(はら)む風の旋律(せんりつ)が、ジーイン達の大攻勢を無人の野を行くが如(ごと)く薙(な)ぎ払っていったーッ！！

『ぐあッ！！』×4

華と龍が乱れ舞う空中戦は一方的な物となり、攻守の入れ換りを機に、正友の舞いは更に速さを増したッ。

「龍を酔(よ)わせし里の巫女(みこ)もろ手に華の姫扇(ひめおうぎ)」

反撃に転じた正友の攻撃は唄(うた)を交じえての華麗(かれい)なる能舞台(のうぶたい)となったッ

。

「ひとたび舞えば香(かぐわ)しき風の誘う夢うつつ」

その攻撃をくらったジーイン達は、異空間へと飛ばされたような感覚に陥(おちい)り、打撃(だげき)のダメージと舞いの催眠効果で朦朧(もうろう)としているッ。

「女の子に手荒(てあら)な真似はしたくないけど、しょうがない...夢心地に倒れろッ。」

猛(たけ)る飛龍のいななきにおののく人の儂(はかな)さよ

天地(あめつち)砕くその牙になす術もなく散るばかり

「天地決壊怒龍翔(てんちけっかいどりゅうしょう)！！」

美しき花野に蝶(ちょう)が舞う極楽(ごくらく)。涅槃(ねはん)の静寂(せいじゃく)と安らぎの夢の中に包まれているジーイン達を、荒々しき竜巻(たつまき)がその世界ごと吹き飛ばしたーッ！

！

『うあああーっ!!』×4

「行ってらっしゃい大霊界(だいいいかい)!!なーんちゃって♪手加減しといたからね。」

ドーン・・・

「なかなか強いじゃない、あなたのお友達。」

手下がのされたにも関わらず、余裕のリンシャン。

勢いよく飛びかかっていったはるかであったが、体術で勝(まさ)る彼女の反撃に遭(あ)い、防ぐのがやっとの状態となっていたッ。いつの間にか、空中へともつれこんだ激しいラリーにも、リンシャンの方ははるかに話しかけたりして余裕があるようだッ!!

リンシャンの武器には柄(え)の部分に `月牙(げつが)、という、三日月(みかづき)のような形をした中国特有の暗器(あんき)が付いていて、多彩(たさい)な攻撃を生みだしているッ。見慣れないそのバリエーションに、苦戦を強いられるはるか。そこに一瞬の隙(すき)が生まれた一ッ。

「あッ!？」

「恰(は)ッ!!」

バキッ!

「きゃああーっ!」

ドドドドゴオオオーン・・・

鉤(こう)と呼ばれるリンシャンの武器の先端(せんたん)には、名前の通り鉤(こう)が付いて、はるかを引っ掛け自由を奪うと、腹部に蹴りを浴びせ吹き飛ばした一ッ!!

「うっ...くはッ!!」

「痛そうね。まだやるの？」

内力(メキド)で打撃を緩和(かんわ)していなければ、死んでいただろう・・・息を上げさせながらも構えるはるか。それを見てリンシャンが次の武器を出したッ。

「雷帝の怒りに触れて痺(しび)れるがいいわ。雷光(らいこう)よッ集(つど)えッ！ヴァジュラ(金剛輪刀)！！」

インドのチャクラムという円形の刀に似た物が、リンシャンの身の囲りを漂(ただよ)いだしたッ

。

「ファイヤービュート(火焰鞭)！！」

得体(えたい)の知れない武器なので、なるべく近づけないようにしようと、はるかは鞭(むち)で迎撃(げいげき)するつもりだッ。

「ターゲットヴァジュラロックオン(標的補足)。痺(しび)れよッ、サンダースピンドル(環状稲妻無双撃)！！」

6枚のヴァジュラを自在に操(あやつ)り、まるでジャベリングでもしているかのようにはるかを攻撃してくるッ。かろうじて防いでも、また弧(こ)を描きリンシャンの元へ戻り、はるかへ。その攻防はどんどん速くなっていくーッ。

「フェニックススターダストエクスプロージョン(不死鳥流星拳)！！」

これはジャン・ピエールとの戦いで用(もち)いた技だッ。流星のような炎が、はるかの周囲を駆け巡るーッ!!

「フッ、その額の証、メノラー(燭台(しよくだい))。私を秘宝へと導(みちび)いてくれる。もう少しよ...ハハハッ。」

(メノラー...!?)

そう言って笑いだしたリンシャン。ようやくの思いでヴァジュラを破壊(はかい)した、はるかが肩で息をしながら問いだしたッ。

「ハアハア...メノラーって何？」

「そんな事も知らないの？ユダヤの象徴。六芒星(ろくぼうせい)と共に、唯一神(ゆいいつしん)にまつわる主要な場所には常にその印があるのよ。」

「ハアハアハア...」

「だいぶ息が上がってるわね。」

「はるか、もうやめとけて！！オレがやるよ。」

「黙ってて！！正友ッ！」

「なんなら二人がかりでも構わないわよ？」

「あなた達みたいに卑怯(ひきょう)なマネなんか絶対にしないッ!!」

「あら、言ってくれるわね。」

燃えたぎるはるかのオーラが不死鳥を型取りだし、手からは炎の玉が生まれだしたッ！！

「燃えろッフェニックス！！」

「フフ、バトルボール(神気珠玉)...神より授(さず)かりし力。あなただけが使える訳じゃないわよッ。でもそんなメキド(内力)じゃ、私のウィニングショットを使うまでもないわね。」

「天界を護る浄炎(じょうえん)よ、集えッ！！」

両手で太極の印を描くと、ボールはその勢いをさらに強めたッ。

「天弓(てんきゅう) セナケリブ(世那勁理武)！！」

ほとぼしる雷が弓矢(ゆみや)となった一ッ！！

「スーパーライジングエンパイアフェニックスショット!!(不死鳥飛翔皇炎弾)」

自らが編みだしたボールに、天界の炎を注いだ渾身(こんしん)の一撃。それは加速するごとに勢いを増し、名のごとく低空飛行からライジングボールとなっていった一ッ！！

「キングルインサンダーボルト！！(霸王滅殺雷光閃)」

いかつい漢(おとこ)の顔が上部先端に施(ほどこ)された雷型の弓。弦(げん)がいっぱいに引かれると、装飾(そうしよく)の漢(おとこ)の口が大きく開き、叫んでいるかのように表情をこわばらせると、弦からは激しくスパークする矢が放たれた一ッ！！

ドーーーーーン

なんとその矢ははるかのボールを破壊し、その勢いを落とす事なく、はるか射止(いと)めんと突き進んできた一ッ!!

(かわせない...!?)

リンシヤンの放った矢のあまりにもものスピードに、頭では分かっているもはるかは動けないッ

シュツバツ...

はるかの目の前に、突如(とつじょ)男の影が現れたッ!!

「何、ボサツとしてんだッ!!」

(正友!?)

「飛龍劍現(ひりゅうけんげん) 天空風切丸(てんくうかぜきりまる)!!」

龍をあしらった直刀(ちよくとう)を手に、正友が雷の矢に立ち向かったッ。

ガシャーーン...

かろうじて方向をずらすことに成功したが、しばらくして矢は大空で大爆発を起こし、とてつもない規模の雷雲(らいうん)を起こした一ツ。

ドーン...

鳴り響く雷。それはこの辺り一帯を地獄絵図のような暗黒と恐怖に包んだッ。

～次章へつづく～

バトルボーラーはるか
第一集
バトルボール
第4章 美しき刺客 (後編)

<http://p.booklog.jp/book/55327>

著者：Ψ (Eternity Flame)

英 樹 (はなぶさ いつき)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile>

ブログ：<http://profile.ameba.jp/jjmmd123/>

編集：Ψ (Eternity Flame)

秋乃空 (あきのそら)

ブログ：<http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/>

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへお願いします

<http://p.booklog.jp/book/55327>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55327>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ